

SHOW-HHEYシネマルーム

戦場でワルツを

2008年・イスラエル、ドイツ、フランス、アフリカ合作、イスラエル映画
配給/ツイン、博報堂DYメディアパートナーズ・90分

2009(平成21)年10月5日鑑賞

東宝試写室

Data

監督・脚本・製作：アリ・フォルマン

出演：アリ・フォルマン/ボアズ・
レイン=バスキーラ/オー
リ・シヴァン/カルミ・クナ
アン/ロニー・ダヤグ/シュ
ムエル・フレンケル/ロン・
ベン=イシャイ/ドロー
ル・ハラジ

👁️👁️ みどころ

第81回アカデミー賞外国語映画賞で『おくりびと』(08年)の対抗馬、というより本命だった本作が遂に日本で公開!「アニメーションとドキュメンタリーの融合」とは?そして原題『WALTZ WITH BASHIR』のバシールとは?イスラエル人監督アリ・フォルマンが19歳の時に兵士として体験したのが1982年のレバノン侵攻だが、当時の記憶が全くないのはなぜ?64年間平和を享受していた日本は、常時戦時体制のイスラエルとは対極の立場。そんな日本の若者こそ本作を観て、イスラエルの若き兵士たちの苦悩を少しでも理解する必要があるのでは?

『おくりびと』のライバルが、やっと公開

アカデミー賞の作品賞や監督賞など、ノミネートされるのは5作品。そして、第81回アカデミー賞で外国語映画賞にノミネートされた作品の1つが滝田洋二郎監督の『おくりびと』(08年)であり、見事栄冠を獲得したのも『おくりびと』。それまで約38億円の興行収入だった『おくりびと』は、2009年2月以降のアカデミー賞受賞凱旋再公開のお陰で60億円以上となり、松竹の黒字化に大きく寄与したらしい。

そんな『おくりびと』の強力なライバルであり、外国語映画賞が最有力視されていたのが『戦場でワルツを』だ。そんな『おくりびと』のライバルの日本公開がやっと実現。さて、こりゃどんな映画?

原題は?バシールとは?

本作の原題は『WALTZ WITH BASHIR』だが、バシールとは一体何?あ

るいは誰？ それを知っている日本人はよほどパレスチナ情勢に詳しい人だけだろう。

プレスシートによると、バシール・ジュマイエルは親イスラエルのキリスト教マロン派民兵勢力「ファランヘ党（ファランジスト）」の若手指導者の名前。イスラエルはこのバシールをレバノンの大統領に据えて、レバノンにキリスト教マロン派政権を樹立しようとしていたが、1982年9月14日ファランヘ党の本部ビルが爆破されバシールは死亡。これが、後の「サブラ・シャティーラの虐殺」の引き金となっただろう。

そんな解説を読むと、『WALTZ WITH BASHIR』という原題には一体どんな意味が？ 『戦場でワルツを』もイマイチ内容がわからない邦題だが、原題の『WALTZ WITH BASHIR』もイスラエルとパレスチナ抗争の歴史について少し真面目に勉強しないとなかなかその意味がつかめない。真面目にそう考える人は、本作をきっかけにその学習を。

アニメとドキュメンタリーの融合とは？

ドキュメンタリー映画にもさまざまなタイプがあるが、劇映画に比べると社会派、問題提起型の作品が多い。1985年からパレスチナ・イスラエル問題にかかわり、17年間にわたって映像による取材を続けてきたジャーナリストの土井敏邦が映画監督として完成させた『沈黙を破る』（09年）もその1つ。これは、2002年春のイスラエル軍によるヨルダン川西岸への侵攻の中で起こったバラータ難民キャンプ包囲とジェニン難民キャンプ侵攻によって、破壊と殺戮にさらされたパレスチナの人々の生活を記録したものだった。それに対して本作は、アリ・フォルマン監督自身が19歳の時に体験した1982年のイスラエルによるレバノン侵攻と「サブラ・シャティーラの虐殺」を描くもの。

本作がユニークな点は、普通のドキュメンタリー映画ではなくアニメで描かれていること。かつて、ホリエモンこと堀江貴文は「放送と通信の融合」を唱えたが、本作は「アニメーションとドキュメンタリーの融合」を目指したものだ。さて、そんな斬新な手法をあなたはどうか評価？

主人公は？ テーマは？

映画の冒頭、宮崎駿監督の『もののけ姫』（97年）とは全く雰囲気が違う、ものすごい形相をした犬たちが登場するから、私はまずこれにビックリ。こりゃ一体ナニ？ これは、本作の主人公アリ・フォルマン監督の旧友であるボアズ・レイン＝バスキーラが毎晩みる悪夢らしい。つまり、2006年の今、映画監督となったアリは30年来の友人で会計士のボアズから、毎夜26匹の犬に襲われる夢に悩まされているという相談を聞いているわけだ。この夢は一体何を意味するの？ それはひょっとして、自分たちが19歳で兵役に就いた1982年のレバノン戦争の後遺症？

そこでアリが気付いたのが、「俺には当時の記憶が全くない」こと。こりゃ一体なぜ？ そこからアリの24年前の記憶をたぐり寄せる旅が始まることになる。それが本作のテーマだ。それを助けるのが、アリの親友で私設脳床精神科医のオーリ・シヴァンやアリの学友カルミ・クナアンたち。また「サブラ・シャティーラの虐殺」などについてのインタビュー

ーに答えるのが、元サブラ・シャティーラ地区担当の戦車隊員ドロール・ハラジやTVジャーナリストのロン・ベン=イシャイたち。アリの記憶の断片はペイルート西部の海を全裸で漂うという奇妙なものだったが、彼らの証言からアリは一体何を思い出し、どんな記憶を紡いでいくのだろうか？そして、その結果アリがたどり着く結末とは？

平和ニッポンの若者こそ、こんな映画を！

イスラエルとパレスチナの抗争については難しくわからない点が多い。そのうえ、政治ネタを敬遠し海外の政治や戦争に関するニュースなどに全く興味を持たない日本の若者は、本作が描くさまざまな「事実」についてさっぱりわからないかもしれない。しかし本作を観れば「学問的に」ではなく、「感覚的に」イスラエルの若き兵士たちがどんな極限状況に置かれていたのか少し理解できるはずだ。

戦後64年間日米安保条約の下で平和を享受し、民主党新政権下では海上自衛隊によるインド洋での給油活動すら中止しようとしている日本は、常時戦時体制にあるイスラエルとは対極の立場にある。そんな平和ニッポンの若者こそ、こんな映画から若きイスラエルの兵士たちの苦悩を少しでも感じ取る必要があるのでは？

2009(平成21)年10月7日記


107

「戦場でワルツを」

(きょうから梅田ガーデンシネマで公開)

今年始めは「おくりびと」(2008年)の来アカデミー賞外国語映画賞受賞に日本中が沸いたが、実はあの時本命だった作品がこれ。1982年、イスラエルのレバノン侵攻に参戦した元兵士の体験的ドキュメンタリーによるパレスチナ難民キャンプで起きたサブラ・シャティーラ大虐殺がテーマだ。

この名作から中東問題を！

高橋駿や細田守アニメに見刷れた目には、アニメとドキュメンタリーの融合は斬新だが少し違和感も。しかし映画監督の主人公アリ・フォルマン自身の19歳の従軍体験を元に、抜け落ちた記憶から人間の深層心理を探り出す旅にはアニメが最適？ 兵士が全裸で海の中を漂うシーンやワルツを踊るように銃を乱射する

シーンが幻想的だ。原題は「パシールとワルツ」だが、パシールとは？ 彼は82年9月にレバノン大統領に選出された直後に暗殺された親イスラエルのパシール・ジェマイエルのことだが、その背景は？ この映画はパレスチナ人、レバノン人の考え方や行動などが一切出てこなかった。中東問題の苦手な日

本人が理解するには基礎知識が必要だ。日本は戦後64年間続いた平和の中で政権交代が実現した今、民主党政権は友愛を掲げやさしい政治を目指している。内外に問題山積だが、それは所詮平和な島国での贅沢な悩み。本作を観れば、泥沼化するイラク・アフガン問題と同様、複雑化・深刻化するパレスチナ問題が実感できる。国民皆兵制のイスラエルでは18歳で男子は3